

グラム・シュミットの直交化法について

担当：大矢 浩徳 (OYA Hironori)*

以下では $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ or \mathbb{C} とする。グラム・シュミットの直交化法がうまく働くことの厳密な証明を与える。グラム・シュミットの直交化法を再掲しておこう。

グラム・シュミットの直交化法 (Gram-Schmidt orthonormalization)

$B = \{v_1, \dots, v_n\}$ を \mathbb{K}^n の基底とする。このとき、以下の方法で B から \mathbb{K}^n の正規直交基底を得ることができる。

$$\begin{aligned} \mathbf{u}'_1 &:= v_1, \\ \mathbf{u}'_2 &:= v_2 - \frac{(\mathbf{u}'_1, v_2)_{\mathbb{K}}}{(\mathbf{u}'_1, \mathbf{u}'_1)_{\mathbb{K}}} \mathbf{u}'_1, \\ \mathbf{u}'_3 &:= v_3 - \frac{(\mathbf{u}'_1, v_3)_{\mathbb{K}}}{(\mathbf{u}'_1, \mathbf{u}'_1)_{\mathbb{K}}} \mathbf{u}'_1 - \frac{(\mathbf{u}'_2, v_3)_{\mathbb{K}}}{(\mathbf{u}'_2, \mathbf{u}'_2)_{\mathbb{K}}} \mathbf{u}'_2, \\ &\vdots \\ \mathbf{u}'_k &:= v_k - \sum_{i=1}^{k-1} \frac{(\mathbf{u}'_i, v_k)_{\mathbb{K}}}{(\mathbf{u}'_i, \mathbf{u}'_i)_{\mathbb{K}}} \mathbf{u}'_i, \\ &\vdots \\ \mathbf{u}'_n &:= v_n - \frac{(\mathbf{u}'_1, v_n)_{\mathbb{K}}}{(\mathbf{u}'_1, \mathbf{u}'_1)_{\mathbb{K}}} \mathbf{u}'_1 - \dots - \frac{(\mathbf{u}'_{n-1}, v_n)_{\mathbb{K}}}{(\mathbf{u}'_{n-1}, \mathbf{u}'_{n-1})_{\mathbb{K}}} \mathbf{u}'_{n-1}, \end{aligned}$$

とし、

$$\mathbf{u}_k := \frac{1}{\|\mathbf{u}'_k\|} \mathbf{u}'_k, \quad k = 1, \dots, n$$

とすると、 $\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n\}$ は \mathbb{K}^n の正規直交基底となる。

グラム・シュミットの直交化法で正規直交基底が得られることの証明。

$\{\mathbf{u}'_1, \mathbf{u}'_2, \dots, \mathbf{u}'_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であること、特に各 \mathbf{u}'_k は $\mathbf{0}$ にはならないこと：

各 $k = 1, \dots, n$ に対し、 $\{\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_k, v_{k+1}, \dots, v_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であることを k に関する帰納法で示す。
($k = n$ の時が欲しい主張であることに注意。) $k = 1$ のとき、定義より $\{\mathbf{u}'_1, v_2, \dots, v_n\} = \{v_1, v_2, \dots, v_n\}$ なので主張は正しい。次に、 $k \geq 1$ で $\{\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_k, v_{k+1}, v_{k+2}, \dots, v_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であることを仮定して、 $\{\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_k, \mathbf{u}'_{k+1}, v_{k+2}, \dots, v_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であることを示す。

* e-mail: hoya@shibaura-it.ac.jp

補足：岩澤分解 (興味がある人向け)

上の『 $\{\mathbf{u}'_1, \mathbf{u}'_2, \dots, \mathbf{u}'_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であること, 特に各 \mathbf{u}'_k は $\mathbf{0}$ にはならないこと』の証明中に行った議論から, 各 $k = 2, \dots, n$ に対して対角成分が全て 1 のある上三角行列 N_k が存在して,

$$\begin{aligned} (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) &= (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_{n-2} \mathbf{u}'_{n-1} \mathbf{v}_n) N_n \\ &= (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_{n-2} \mathbf{v}_{n-1} \mathbf{v}_n) N_{n-1} N_n \\ &\dots \\ &= (\mathbf{u}'_1 \mathbf{v}_2 \cdots \mathbf{v}_{n-1} \mathbf{v}_n) N_2 \cdots N_{n-1} N_n = (\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) N_2 \cdots N_{n-1} N_n \end{aligned}$$

となることがわかる. ここで, 対角成分が全て 1 の上三角行列の積は再び対角成分が全て 1 の上三角行列となることから, $N' := N_2 \cdots N_n$ とすると, N' は対角成分が全て 1 の上三角行列で,

$$(\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) = (\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) N'$$

と書けることがわかる. さらに, $N := (N')^{-1}$ とすると, N も対角成分が全て 1 の上三角行列で,

$$(\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) = (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) N$$

である. 次に,

$$A := \begin{pmatrix} \|\mathbf{u}'_1\| & & & \\ & \|\mathbf{u}'_2\| & & \\ & & \ddots & \\ & & & \|\mathbf{u}'_n\| \end{pmatrix}$$

とすると,

$$(\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) = (\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n) A$$

である. 以上より,

$$(\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) = (\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n) AN$$

となる. ここで, \mathbb{K}^n の n 個のベクトル $\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n$ に関して,

- $\{\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底 $\Leftrightarrow \mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n$ を並べてできる n 次正方行列 $(\mathbf{w}_1 \cdots \mathbf{w}_n)$ が正則.
- $\{\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n\}$ が \mathbb{K}^n の正規直交基底

$$\Leftrightarrow \mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n \text{ を並べてできる } n \text{ 次正方行列 } (\mathbf{w}_1 \cdots \mathbf{w}_n) \text{ が } \begin{cases} \text{実直交行列 } (\mathbb{K} = \mathbb{R} \text{ のとき}) \\ \text{ユニタリ行列 } (\mathbb{K} = \mathbb{C} \text{ のとき}). \end{cases}$$

という対応を思い出すと, 上の考察から以下の定理が言える:

定理 (岩澤分解)

任意の実正則行列 $X_{\mathbb{R}}$ に対し, ある実直交行列 $U_{\mathbb{R}}$, 正の対角成分を持つ対角行列 A , 対角成分が全て 1 の実上三角行列 $N_{\mathbb{R}}$ が存在して,

$$X_{\mathbb{R}} = U_{\mathbb{R}} A N_{\mathbb{R}}$$

となる.

また, 任意の複素正則行列 $X_{\mathbb{C}}$ に対し, あるユニタリ行列 U , 正の対角成分を持つ対角行列 A' , 対角成分が全て 1 の複素上三角行列 $N_{\mathbb{C}}$ が存在して,

$$X_{\mathbb{C}} = U A' N_{\mathbb{C}}$$

となる.